喧嘩の後に

Blackfruits

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
喧嘩の後に

【Ｎコード】
Ｎ９９８４Ｋ

【作者名】
Ｂｌａｃｋｆｒｕｉｔｓ

【あらすじ】
遠慮してなかなか本音を話せない私と、積極的な友人。
二人はある日喧嘩をしてしまう。
初めて本音でぶつかったその先に残るのは？

（前書き）

この話はフィクションです。

「だから、あんたにも付いてきてほしいの！」
昼休みに私の向かいに座っていた美佐が声を熱くして話した。
「で、でも…」
私の煮え切らない様子に彼女はいらいらしたように話す。
「だからぁ…ちょっと後ろ付いてきてくれるだけでいいから！」
その気迫に押され、私は思わず頷いてしまった。
美佐は気が強くて私よりも結構積極的な子だ。
でもその割に繊細な部分があるのか、クラスで一番一緒に行動している相手は私ぐらいだった。
お互い気づいたら一緒に行動している感じで、とりわけ仲が良いという感じもしない。
今日もそんな感じで午後の授業が過ぎて、放課後を迎えた。
「さ、行くよ！」
美佐は私の腕を半ば強引に引いて、体育館に向かった。
バスケ部が活動していて、美佐が会おうとしている相手は休憩中だった。
彼女は今告白するつもりらしい。
一人じゃ気が引けるからか、私に付いてきてほしいそうだ。
でもなんとなく、告白の時に私がその現場にいていいものなのだろうかと思っていた。
「先輩…ずっと好きでした。私と付き合ってください」
なるべく聞かないように心がけていた私の耳に、そんな感じの告白が聞こえてきた。
先輩はこちらをちらりとみやった。
そしてつぶやく。
「ごめん…」
美佐の肩が小さく震えたようにみえた。

「俺付き合っている人いるから…」
部活のメンバーが先輩の名前を呼んだ。
先輩は「今行く」と言って、美佐の方をみる。
「じゃあ…ごめん」
美佐は黙っていた。
思わず彼女の顔を覗き込んだ。
目に涙がたまっている。
「あ！美佐…」
美佐は体育館裏の小道を駆けだした。
私は思わず追いかけた。
「ちょっと待って…」
美佐は追いかけてきた私をみて、言葉を吐きだした。
「本当は知ってたんじゃない？」
「え？」
「だって、昼休み私に付いてきてって言ったら嫌そうにしてたじゃん！先輩に彼女いるの知ってたんじゃないの？それに昼休みあんたといてもいつも話すのは私ばっかりだし、一緒にいても楽しくない！何考えてるか分からないし、友達って感じがしない！」
私は黙りこんだ。
そんなつもりじゃない――
それに今どうしてそんな話をするの？
何も話さない私をみて、彼女は「ほら」と言った。
「どうせこう言ったって何も言わないし…」
私はそのままうつむいた。
「……」
そんなつもりじゃないのに。
なんて話をしたらいいかとか…こんなこと言ったら嫌われるんじゃないかとか、考えてしまうことがいっぱいある。
美佐みたいに言いたいことをすぐ言えたらって…
私だって羨ましいのに――

「……美佐にはわからないよ」
　気づいたら私の口からそんな言葉が飛び出していた。
そのまま堰を切ったかのように言葉が飛び出してきた。
「私だって…他の人に自分から話しにったり、積極的に友達つくったりできたらいいなと思ってるよ…いっぱい友達作ったり、好きな人に告白できるくらい積極的になれたらいいなって思うよ。美佐のこと羨ましいって思うこと何回もあったよ！美佐に私の何がわかんの！一緒にいて劣等感感じてることだって、美佐には分からない！私がもっと美佐みたいに自分のこと話したり積極的だったら、絶対美佐と友達になったりしないっ！」
　私は言いたいことだけ言って美佐の前から逃げ出した。
そのまま教室に戻って素早く鞄を取って、玄関に向かった。
ぽつぽつとした雨の痕をみて、傘を持ってきたことを思い出す。
何か、熱に浮かされたみたいで周りの風景さえ目に入らなかった。
彼女に本音をぶつけたという妙な達成感と、これから先への不安が、背後から忍び寄ってきている気がした。
雨は先ほどよりも激しかった。
今の自分の気分みたいだなと、なんとなく思った。
　いつも通りの学校の通学路をぼんやりと歩き続けた。
激しかった雨が大分止んできている。
赤信号に歩みを止められた。
雨音に紛れて、声が聞こえた。
「春香！」
　美佐の声だった。
振り返ると、美佐がいた。
息を切らしながら、彼女は気恥ずかしそうに笑った。
「先帰っちゃうから走ってきたよ…」
　私が何も言えずに黙っていると、彼女は私の横に並んでつぶやいた。
「ごめん…」

美佐はそう言った。
「あたし先輩に振られて、春香に八つ当たりした…」
彼女は気まずそうに話す。
「……いつも本当のことあたしに話してくれてない気がして…なんか本音を話してほしくて。気兼ねしてるんじゃないかなっていうのなんとなく分かっていたけどさ…だって、友達だったらもっとお互いのこと話してほしいじゃん。だから…ついああ言った」
私は俯いた。
「だから、春香の本音聞いてショックも受けたけど…ちょっと嬉しかった」
私は驚いて顔をあげた。
美佐と顔を見合わせる。
「初めて春香の本音知った気がしたから」
私の背後にあった不安が、さあっと消えて行ったような気がした。
「私の方こそ…ごめん。本当は美佐傷ついてたのに…」
「いいよ、だって先に私が八つ当たりしちゃったんだし」
私たちはぎこちなく笑った。
お互いに言いあった言葉は本当の言葉だった。
互いに、相手に対して嫌だと思うような部分もある。
でもなんとなく、これからもっと友達になれるような気がした。
今度は、本当に――
前をみやった。
雨は止んで、太陽の光が差し込んでいる。
空にはうっすらと虹がかかっていた。

（後書き）

この話はフィクションだけど、私もある種似たような経験をしたことがあります。
人間関係ってすごく難しいですよね…
読んでくださった方々に感謝をこめて。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9984k/

喧嘩の後に

2010年10月14日21時31分発行